

サムウェアーズとエニウェアーズの違いを考慮した若年層の地方定住促進要因に関する研究

片岡 将¹・川端 祐一郎²・藤井 聡³

¹学生会員 京都大学大学院 工学研究科都市社会工学専攻 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4)
E-mail: kataoka.s@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

²正会員 京都大学大学院助教 工学研究科都市社会工学専攻 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4)
E-mail: kawabata.yuichiro.8x@kyoto-u.ac.jp

³正会員 京都大学大学院教授 工学研究科都市社会工学専攻 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4)
E-mail: fujii@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

東京一極集中と地方衰退の進行が著しい我が国では、災害リスクの高まりや国土の不均衡が懸念され、また地元定住を望む若者が就職を機に東京への移住を強いられることによる、国民の厚生低下が生じている恐れもある。この傾向に歯止めをかけ、定住型社会実現の方途を探るため、本研究では地方出身の若者のうち、地元就職者と大都市就職者を対象に、就職地の選択理由等の調査を行った。調査においては David Goodhart (2017) が提唱する「サムウェアーズ/エニウェアーズ」というパーソナリティ分類に従う価値観を計測する尺度を開発し、その価値観分類の妥当性と、両者で就職地選択要因がどのように異なるかを確認した。その結果、この価値観分類は妥当性をもち、就職地選択に影響すること、地方定住促進要因においては、両者で相違が存在することも明らかになった。

Key Words: Somewheres, Anywheres, Employment opportunities, Settlement, Regional dispersion

1. 本研究の背景と目的

(1) 東京一極集中と地方の衰退

わが国は、東京圏に人口が集中する「東京一極集中」という問題に直面している。そもそもそうした東京をはじめとする三大都市圏への人口流入は、高度経済成長期における工業化の進展に伴い、都市の工業地帯で大量の労働力が必要とされたところに活発にみられるようになった。その後 1970 年代前半の高度経済成長期の終焉とともに三大都市圏への転入超過は大きく減少に転じることになるが、1980 年代半ばのバブル期にかけては再び東京圏への人口流入が活発化する。バブル崩壊後は一時的に東京圏における人口移動は転出超過となったものの、2000 年代には再び流入が増加し¹⁾、2018 年においても、東京圏への転入超過数は前年の記録を上回る事態となっている。

そうした東京への大移動は、15 歳から 29 歳の若年層が全体の約 5 割を占め、平成 27 年に行われた「大都市圏への移動等に関する背景調査」²⁾によれば、東京圏へ移動した 10 代の約 7 割は入学や進学を理由に転居し、同じく東京圏へ移動した 20 代の約 3 割は就職を理由としていることが明らかになっている。こうした若年層の

地域移動を発生させるものとしては、地方と大都市における就業機会や労働条件の格差が要因のひとつとして考えられる。さらには平田ら³⁾、柳川ら⁴⁾によって東京圏と地方における鉄道や道路をはじめとする交通インフラの整備格差が人口の一極集中化をもたらしている可能性が示唆されている。東京や大阪をはじめとする大都市圏にインフラが偏在している状況は、地方における生活と比較して大都市圏での生活を利便性の高いものとさせることは明らかであると考えられ、このような側面から、経済的に豊かで便利な生活を志向する若者にとって大都市圏へ転居することは、避けがたい選択肢となっていると考えられる。

ただし東京への人口一極集中自体は経済的な側面からその合理性が指摘されることもあるが、被災リスクの高さや地方衰退といった多くの弊害も同時に持つものであり、こうした弊害を解消するためには、地方への人口分散化が必要であると考えられる。そして東京への人口流入の過半を若者が占めているのであれば、彼らが地元で定住できるような政策を講ずることにより、人口の分散化をより効率的に促すことができると考えられる。

(2) 若者の地元志向

また現在のインフラや企業の大都市偏在は、国民の幸福度追求という観点からも不合理であることが考えられる。実際、既往研究においては近年若者の地元志向が高いことを指摘するものもあり、例えば中村⁵⁾は関西圏の高校3年生に対して、インタビュー調査を行い、進路選択について「近さ」を重要視するローカリズムがあることを示している。また労働政策研究・研修機構の行った調査報告⁶⁾においても、現在の若年世代は先行世代と比較して、進学移動や就職移動において地元定着を選択する割合が高くなっている傾向が示されている。

こうした若者の地元志向傾向に鑑みれば、東京をはじめとする大都市へ移動した若者の中には、地元で暮らしたいが、良質な雇用や生活環境がないので、やむなく移動したものが存在することが考えられる。そしてこうした背景をもった地域移動が少なくないのであれば、地元で豊かさを追求できる環境が存在することが、国民の幸福につながるはずである。

(3) 海外における地元志向派とエリートの対立（サムウェアーズ/エニウェアーズ）

ところで近年、地方部への定住者と都市部への移住者の間にしばしば見られる価値観の違いが、重要な政策決定に影響を及ぼしているという議論が高まっている。イギリスのジャーナリスト David Goodhart は、前者をサムウェアーズ、後者をエニウェアーズと呼んで、その両者の価値観体系が、グローバル化や新自由主義からの転換を生じつつある現代世界の政策決定に大きな影響を及ぼしていると論じている⁷⁾。

サムウェアーズはイギリス国民の約 50% を占め、保守的で古くからの伝統や秩序を重んじる傾向にあり、昨今のグローバリズムや経済自由主義、大量移民等の急速な社会変化については快く思うことはあまりない。また彼らは地域や国家への帰属意識が強い庶民的な人々であり、小さな町や地方郊外に居住している。一方で、エニウェアーズはイギリス国民の約 25% を占め、新しいものや自由や平等といった普遍的な価値観を重視する人々である。またグローバリズムや経済自由主義、大量移民等の社会変化にも好意的であり、地域や国家への帰属意識が弱く、移動の自由に大きな価値を置くエリート階級である。彼らはロンドンをはじめとする大都市に居住している。

このような両者の対立は、1980 年代以降の移動の自由化や経済自由主義等によるグローバル化が原因で発生した。そして近年のブレグジットやトランプ大統領の誕生といった現象は、グローバル化の弊害に対するサムウェアーズの反動であると言われている。

日本においては、こうした国民の分断を指摘する声は今のところ殆どない。しかし、先述のように地元への居

住意向を持ちつつも、所得や雇用機会の格差によって経済的に豊かな生活と引き換えに大都市での生活を余儀なくされる若者は存在すると考えられる。また柴山⁸⁾が東京一極集中の原因の一つとして、製造業企業が生産拠点を海外に移す一方で、グローバルに情報や資本が大都市に集まる結果として大都市にサービス業を中心とした雇用が生まれていることを指摘している。つまり我が国の若者の地域移動という現象もイギリス同様にグローバル化の影響を受けているのであり、そうした情勢に若者が翻弄されている以上、「サムウェア/エニウェア」という価値観軸によって若者の価値観を捉えることができるかどうかを確認することには意義があるであろう。そしてそのような価値観軸の有用性が認められるのであれば、その価値観軸を考慮しながら定住政策を検討する必要がある。日本においても先のサムウェアーズに属するような地元志向派の人々が過半を占めるのであるならば、そうした人々の価値観に合わせた社会や秩序が構想されるべきであると考えられる。

(4) 本研究の目的

以上のような背景に基づき、本研究では、地方出身の若者のうち、地元での就職を選択した者と、大都市部への移住を選択した者の双方を対象とするアンケート調査を行い、就職地を選択した理由や、どのような条件が整えば都会への移住ではなく地元への定住に（あるいはその逆に）行動が変容したと考えられるかを尋ねるアンケート調査を行う。そして、Goodhart が提唱する「サムウェア/エニウェア」というパーソナリティを計測する尺度の開発を試み、その価値観分類の妥当性を確かめる。さらに若者全体の定住促進要因の調査を行うとともに、サムウェアーズとエニウェアーズの間で定住促進要因がどのように異なるかを確認する。そしてこの調査及び分析に基づき、地元志向派の人々が、地元にながら自らの希望に沿った生活が送れるような社会の実現に必要な政策は何であるかを検討し、国民の幸福に資する都市・国土構造を実現するために有用な知見を供することを目的とする。

2. 既往研究と本研究の位置づけ

本章では、人口の地域移動の要因について検討を行っている既往研究について概観する。

(1) 移動の直接的な要因に関する既往研究

移動発生の要因については古くから検討が行われてきており、それら諸要因は所得差論、雇用機会論、人的資本論、Place Utility 論、心理抵抗論、という 5 つに大別できることを青木ら⁹⁾は指摘している。本節では、こう

した枠組みにそって、地域間移動要因について検討した研究について概観する。

所得差を地域移動の要因として言及した学者としては古くは Hicks¹⁰⁾ が挙げられる。Hicks は労働の場所的移動については、当時の調査においては賃金格差が移動の主要因であることを示しつつあると述べている。近年の研究としては豊田¹¹⁾の研究が挙げられる。豊田は 1993～2008 年の住宅・土地統計調査のマイクロデータを使用し、世帯規模、年齢構成及び物価水準を考慮した都道府県別世帯所得(中央値)の推定を行った。その結果、地理的な所得分布は首都圏を頂点に国土の中央部で高く、周辺部で低いこと、また世帯所得の地域間格差はほとんど拡大していないが、所得水準と人口社会増加率には正の相関があり、その関係が強まっていることから、低所得地域から高所得地域への人口移動が活発化していることを明らかにしている。

また雇用機会論を初めて提唱した Schultz¹²⁾ は 1920 年から 1944 年までの一部期間において、工業従事者の賃金に対する農業者賃金が相対的に高い時期に、農業から工業への人口流出が増加し、一方で低い時期においては逆の傾向がみられたことから、「価格ではなく仕事の機会の存在が農業人口を農場から連れ出し、或いは彼らにそのまま止まることを要求する」と述べている。

また近年の研究については、湧上¹³⁾の研究が挙げられる。湧上は都道府県間移動率に賃金格差、失業率格差が与える影響を分析したところ、25 歳以上の年齢層においては失業率格差の係数が有意に正である一方で、25 歳未満においては失業率格差の影響がみられないことを示している。

人的資本論では、移転先での高い所得やより良い物理的・社会的環境をベネフィットととらえ、一方で移動に伴う金銭的費用や従来の人間関係を断ち切ることに伴う精神的費用をコストととらえる。そして生涯にわたり持続するであろうその両者を用いて、就業期間における割引率を考慮しながら、移動による純利益を算出、評価する枠組みである。こうした枠組みによって、それまで所得差や雇用機会など社会経済的要因しか考慮されていなかった地域間移動研究について、心理的要因まで拡張可能となったことにその特徴がある。Sjaastad¹⁴⁾はこの枠組みを用いて、年齢層が高くなるにつれて移動量が減少する要因は、高齢者ほど残りの就業期間が短いので回収可能な移動利益が少なくなることにであると述べている。

Place Utility 論は、人々は地域間人口移動を行う際に就業機会だけでなく周辺の生活環境も含めて移動先を決定している、という理論である。関連する研究としては青山¹⁵⁾の研究が挙げられる。青山は昭和 55 年から昭和 63 年間の 9 年間の全国地域における 2 地点間の人口移動量、住宅地平均地価差、1 日交流圏人口差、平均所得差、

移動機会差(移動機会については、A から B への人口移動は現状の着地 B の人口の集積状況に基づくと仮定し、その移動量の期待値を求めたもの)の推移をもとにモデル推定を行っている。そのモデル推定においては、住宅地平均地価のより低い地域へ、また 1 日交流圏人口、平均所得、移動機会のより高い地域へ人口移動が発生すると解釈できるパラメータを推定している。

また林¹⁶⁾は地域の環境を、都市化の状況、安全・安心、暮らしやすさ、住居、インフラ、医療・福祉、教育、文化、消費生活、就業と幅広くとらえ、31 の指標を用いて主成分分析を行った。その結果、大都市圏と地方圏では、地域経済力や都市的環境について大きな格差があり、若年層の流出阻止には、地方圏における地域経済力や都市的環境に注視した政策の必要性を主張している。

心理抵抗論に基づく研究については、移動の心理的コストや移転先選択における心理的要因の重要性を中心に議論している。研究例として Nelson¹⁷⁾は 1935～1940 年、1949 年～1950 年の州間移動に対して分析を行い、所得も失業も移動に対して相関がないことを示した。そこで、①人々は親戚や友人の近くに住みたがること、②情報の分布が、移動の分布を決めること、この 2 点の検証を試みている。当該研究においては、A から B への過去の移動量が多いほど B の情報が A に流れることが多いこと、親戚や友人が B に多いほど B での生活の不安が小さい、という前提に基づき分析を行っているものであるが、そうした要素を過去の移動量で表し、「親戚・友人乗数」という変数名で分析を行ったところ、地域間移動量についてその効果が確認された。しかし先述の変数が何を意味するか解釈に難しい点があり、その後詳細な分析をするには至っていない。

ただしこうした過去の A から B への移動量が現在の移動に対する心理的抵抗を緩和させていることを示唆する研究は国内研究においても存在し、例えば東北地方出身の若者の地域移動について分析を行った石黒は、東北地方出身者は東京圏や宮城県への移動が多く、そうした一定の進路の型がさらに東北地方出身者の東京圏や宮城県への移動を後押しし、移動者の移動先での適応を助けると主張する。

(2) 移動や定住に関する志向性や価値観について言及した研究

前節では、地域間移動の直接的な要因について検討を行った既往研究について概観を行った。前節では移動という現象に対してその直接的な要因を検討するものがほとんどであったが、本節では、個人の居留意向と価値観の関係について検討を行っている研究を概観する。

杉山¹⁸⁾は北海道の大学生に対して質問紙調査を行い、大学生の地元志向の規定要因について分析を行ったとこ

ろ、地元への愛着意識が地元志向を高める一方で、地元への貢献意識や親の扶養義務認知については部分的にし、かその正の影響が確認されなかった。また挑戦的な仕事を重視する傾向が地元志向への負の影響をもつことと労働条件重視の傾向が地元志向への正の影響をもつことを確認している。

また前村¹⁹⁾は定住や移動を発生させる個人の心理的特性として「定住志向」と「異文化志向」に焦点をあて、二つの志向性の測定と関連性の検討を行っている。大阪府吹田市、京都府京田辺市、沖縄県中城村の住民に対し、質問紙調査を行って分析をし、二つの志向性を測定する尺度を開発している。その結果、「定住志向」と「異文化志向」には逆相関がみられること、「定住志向」においては地域差が見られ、都市部（吹田市）では他の2地域に比べ定住志向が低いことを明らかにしている、また二つの志向性の強度は世代や学歴による差異がみられ、「異文化志向」は若い世代、高学歴者であるほど高く、「定住志向」は高齢世代・学歴が低いほど高い傾向が示されている。

また米原²⁰⁾は鳥取大学の学生らに対し、質問紙調査を行い、地元志向の構成概念について検討を行うとともに、BigFive論からなるパーソナリティ（外向性、誠実性、情緒不安定性、開放性、調和性）、異文化志向、自民族中心主義、親子関係の四つの個人的属性が地元志向にどのような影響を与えているかを分析した。その結果、地元志向尺度において「地元への定住意向」「地元への愛着」という二つの要素からなる因子的妥当性を確認した。また調和性や開放性が地元への愛着を強める効果を確認する一方、いずれのパーソナリティも地元への定住意向に与える影響について有意な関係を確認することができなかった。また異文化志向の強まりが地元への定住意向を弱める影響を与えており、自民族中心主義が地元への定住志向、愛着を強める影響を与えることが確認された。さらに親子関係においては、父との関係、母との関係において一人の人間として親を認知している関係性が、個人の地元への定住志向を弱める影響を与えているという結果となり、親から心理的自立が不十分な若者が地元志向を強める傾向があることを指摘している。

最後に海外研究のレビューを行いたい。国内研究との違いについて、特筆すべき事項は昨今の政党支持と居住地や居住意向との関係について調査した文献が存在することである。したがって最後にそうした研究のレビューを行う。

Jennings²¹⁾らは2005年から2017年までイギリス国内選挙における有権者の投票傾向について分析している。その結果、都市部では、特徴として比較的若く、多様性や教育水準が高い、国際的産業に従事している層を中心に労働党への投票率が上がっているのに対し、人口密度の

低い地域や田舎では、年齢層の高く、多様性の低い層を中心に、保守党への投票率が上がっていることが明らかにし、こうした変化がイギリスにおけるBrexitという投票行動につながったと指摘している。

またLee²²⁾らは、イギリスにおいて2016年に行われたEU離脱をめぐる国民投票の結果に対し、有権者の転居歴が重要な要因となったか検証を行っている。その結果、地域に根付いた個人のほうがそうでないものより7%高くEU離脱を支持していることが明らかとなった。ただしそうした転居歴が賛否に与える影響については、経済的衰退を経験した地域や移民人口の増加した地域でのみ見られたことを示している。

(3) 本研究の位置づけ

ここで本研究の位置づけを示したい。(1)で概観した既往研究は政策として操作可能な要因について検討されている点で一定の意義のあるものであると考えられる。しかしこれまでの研究では、本来存在する移動者の移動をするか否かといった決断に及ぼす個人の意思や価値観という視点が欠落していた。一方(2)で概観した既往研究においてはそうした意思や価値観を可視化している点で意義のあるものである。しかし国内調査のほとんどは特定の地域の住民に対するものであり、それらの示す傾向が全国の住民とりわけ若年層においても見られるか否かについては必ずしも判然とはしない。また、若者の価値観が、実際に移動や定住といった行動と結びついていのか否かを検証した実証研究も、筆者の確認する限り存在していない。

そこで若者の就職時の居住地選択に着目する本研究では、就職したばかり又は就職を控えた、全国の若者に対してアンケート調査を行い、就職のタイミングでの「地元への定住」と「大都市への移住」の選択と、それに影響を及ぼしていると考えられる各地域の社会経済的状況及び若者本人の価値観の関係を分析する。なお、「地方への定住」と「大都市への移住」の間の選択要因を探ることが目的であるため、アンケート調査では「地方出身」の若者を対象とする。

さらに、若年層がもつ価値観については、先のGoodhartが提唱するサムウェアーズとエニウェアーズのそれぞれがもつ価値観に則した心理尺度を作成し使用する。このことには、大きな現代的意義があると考えられる。なぜならば、長きにわたる東京への一極集中と地方の衰退が進行している日本社会と、グローバル化による地域的な経済格差を余儀なくされているイギリス社会の状況はある意味で類似しており、これは全ての先進国にとっての課題であるとも考えられるからである。

3. 調査方法

(1) 調査概要

本調査は、クロスマーケティング社のインターネット調査サービスのモニターから、三大都市圏以外の都道府県を出身地とし、なおかつ 2018 年以降に初就職した若年層、もしくは 2020 年 4 月に就職することが確定している若年層に対して、Web によるアンケート調査を行った。なお地元外就職者については、三大都市圏に属する都道府県に就職した（もしくはする予定の）者に対象を絞った。調査期間は、2020 年 1 月 14 日～1 月 29 日である。回答者抽出の結果、表-1 のようなサンプルを得た。

表-1 抽出サンプル内訳

	男	女	計
地元外就職	46名	104名	150名
地元就職	119名	230名	349名
計	165名	334名	499名

(2) 調査項目

はじめに、本調査における質問項目について示す。本調査票の構成は大枠では以下のようにになっている。

- Q1：地元都道府県・就職都道府県の調査
(全回答者対象)
- Q2：就職地をその場所に決めた理由の調査
(全回答者対象)
- Q3：地元都道府県に就職することがあり得たと思う条件の調査（地元外就職者が対象）
- Q4：地元外の都道府県に就職することがあり得たと思う条件の調査（地元就職者が対象）
- Q5：サムウェア/エニウェア仮説に則した価値観の調査
(全回答者対象)

Q1 については、対象者の地元都道府県、就職都道府県について尋ねるものである。以下では、Q2～Q5 の具体的な質問内容について述べる。

a) 就職地をその場所に決めた理由の調査 (Q2)

Q2 では、回答者が初就職した（もしくはする予定の）際、就職地としてなぜその都道府県を選択したのか

表-2 質問項目 (Q2)

質問項目
1 その場所が自分の「地元」だったから
2 (むしろ逆に) その場所が「自分の地元ではなかった」から
3 その場所が「学生時代に住んで、住み慣れた場所」だから
4 「自分にとってやりがいのある仕事ができる企業」が「そこにたまたまあった」から
5 「職場環境のよい企業」が「たまたまそこにあった」から
6 「将来性の高い企業」が「たまたまそこにあった」から
7 「待遇(給料・福利厚生)のよい企業」が「たまたまそこにあった」から
8 「規模の大きい企業」が「たまたまそこにあった」から
9 「雇用機会が豊富な都道府県」だったから、結果的にそうだった
10 「給与水準のよい働き口が豊富にある都道府県」だったから、結果的にそうだった
11 「物価が安い」ところだから
12 「治安がよい」ところだから
13 「住環境がよい」ところだから
14 「日常生活で使う公共交通機関が便利」なところだから
15 「温かい人間関係がある」ところだから
16 「豊かな自然がある」ところだから
17 「経済的に豊かな生活がおくれる」ところだから
18 「家族がいる」場所だから
19 「地元の友人がいる」場所だから
20 「親や家族の意向で、この場所で働け」と言われたから
21 「この場所に貢献したい」という意志があったから
22 「育児環境が充実している」ところだから
23 「大都市圏へのアクセスがよい」ところ(もしくは大都市圏そのもの)だから
24 「趣味や娯楽等の文化的機会が多い」ところだから
25 「好きなところが何でもできる」ところだから
26 「欲しいものが手に入りやすい」ところだから
27 「流行や文化、芸術の中心」の場所だから
28 「日本の政治にとって重要な地域」だから
29 「日本の経済にとって重要な地域」だから
30 「人間関係が広がりやすい」ところだから
31 「異性と出会う機会が多い」ところだから
32 「都会であり、かっこいい」ところだから
33 「友人・知人にプライベートには干渉されなさそう」な「気楽な場所」だから
34 「話の合う人が多そう」な場所だから
35 「狭いコミュニティや人間関係に疲れることはなさそう」な場所だから

について、「地元就職者」と「地元外就職者」の双方に対して尋ねるものである。要因の選択肢は、第 2 章で概観した既往研究で見られた、労働条件、住環境、交通利便性、人間関係、地元愛着、都会的性質、文化的機会等に関する要因を考慮し、35 の質問項目を作成した（表-2 参照）。なお回答者には、各質問項目に対し、「全く関係ない」「関係ない」「ほとんど関係ない」「どちらともいえない」「やや重要な理由だ」「重要な理由だ」「とても重要な理由だ」の 7 件法で回答を求めた。

b) 地元都道府県に就職することがあり得たと思う条件の調査 (Q3)

Q3 は地元外の都道府県で就職を行った回答者、すなわち地方部の都道府県を地元としつつ、就職地として三大都市圏の都道府県を選択した回答者に対して、「どのような条件が満たされていたら、地元都道府県に就職していたと思うか」を尋ねるものである。本質問はいわば、実際には行われなかった仮想の移動について訊くものである。したがって、回答者自身が十分にイメージできないまま質問について回答してしまう危険性がある。しかしその一方で、本質問はその質問文の特徴から、実際に地元外で就職をするか否か、その選択の境界条件について探るものであり、その点では前項の Q2 よりも直接的にその含意を引き出しうるものであると考えられるため、調査票に含めることとした。なお質問項目については、

とに 26 項目を作成した（表-3 参照）。また全質問において、「全く思わない」「そう思わない」「少しそう思わない」「どちらとも言えない」「少しそう思う」「そう思う」「とてもそう思う」の 7 件法で回答を求めた。また最後に同様の質問内容で、「あなたが一番長く住んでいた都道府県をあなたの『地元』とします。あなたの『地元』の都道府県（あなたがこれまで一番長く住んでいた都道府県）に、どのような条件があれば、『地元』の都道府県で働くことになっていたと思いますか？」というフリー回答欄を設けた。

c) 地元外の都道府県に就職することがあり得たと思う条件の調査 (Q4)

Q4 は地元の都道府県で就職を行った回答者を対象に、「地元がどのようであったら、地元ではない都道府県に移住して就職したと思うか」を尋ねるものである。本質問についても、前項の Q3 同様、実際には行われなかった仮想の移動要因について調査するものであり、Q3 同様に回答者が十分にイメージできないまま、回答してしまう危険性をもつ。しかし、就職時に地元都道府県から転出するその境界条件について調査するものであり、Q2 よりも直接的な政策的含意を得ることができる可能性があることから調査票に含めることとした。質問内容については、既往文献で調査された内容をもとに、全 19 項目で構成した（表-4 参照）。これらの項目におい

表-3 質問項目 (Q3)

質問項目
1 もともと「地元」で就職しようとしていたが、就職活動に失敗した。成功したら「地元」で就職していたと思う
2 「地元」での就職を全く考えていなかったため、どういう就職先があるのか知らなかった。もし情報を集めていたら、「地元」で就職していたと思う
3 「地元」が「雇用機会が豊富な都道府県」であったら、「地元」で就職していたと思う
4 「地元」が「給与水準のよい働き口が豊富にある都道府県」であったら、「地元」で就職していたと思う
5 「地元」が「育児環境が充実している」ところであったら、「地元」で就職していたと思う
6 「地元」が「大都市圏へのアクセスがよい」ところであったら、「地元」で就職していたと思う
7 「地元」の「日常生活で使う公共交通機関が便利」であったら、「地元」で就職していたと思う
8 「地元」で「趣味や娯楽等の文化的機会が多い」としたら、「地元」で就職していたと思う
9 「地元」が「好きなことが何でもできる」ところであったら、「地元」で就職していたと思う
10 「地元」が「欲しいものが手に入りやすい」ところであったら、「地元」で就職していたと思う
11 「地元」が「流行や文化、芸術の中心地に近い」ところであったら、「地元」で就職していたと思う
12 「地元」が「日本の政治にとって重要な地域に近い」ところであったら、「地元」で就職していたと思う
13 「地元」が「日本の経済にとって重要な地域に近い」ところであったら、「地元」で就職していたと思う
14 「地元」が「人間関係が広がりやすい」ところであったら、「地元」で就職していたと思う
15 「地元」が「異性と出会う機会が多い」ところであったら、「地元」で就職していたと思う
16 「地元」が「都会と比しても、かっこ悪くない」ところであったら、「地元」で就職していたと思う
17 「地元」に「自分にとってやりがいのある仕事ができる企業がある」と、「地元」で就職していたと思う
18 「地元」に「職場環境のよい企業がある」と、「地元」で就職していたと思う
19 「地元」に「将来性の高い企業がある」と、「地元」で就職していたと思う
20 「地元」に「待遇（給料・福利厚生）のよい企業がある」と、「地元」で就職していたと思う
21 「地元」に「規模の大きい企業がある」と、「地元」で就職していたと思う
22 「地元」の「企業の採用試験に合格した」のであれば、「地元」で就職していたと思う
23 「地元」に「どのような仕事や企業があるかを知っていた」のであれば、「地元」で就職していたと思う
24 「地元」で「友人・知人にプライベートに干渉される機会」が少なければ、「地元」で就職していたと思う
25 「地元」に話の合う人が多ければ、「地元」で就職していたと思う
26 「地元」が「狭いコミュニティや人間関係から解放されている」ところであれば、「地元」で就職していたと思う

概して Q2 と同様、既往調査で報告されている要因をも て、「全くそう思わない」「そう思わない」「少しそう

思わない」「どちらとも言えない」「少しそう思う」「そう思う」「とてもそう思う」の7件法で回答を求めた。また同様の質問内容、「あなたが一番長く住んでいた都道府県をあなたの『地元』とします。『地元』にどのような条件がなければ、『地元』の都道府県“以外”で働いていただろうと思いますか？自由に記述してください。」とするフリー回答についてもその枠を設けた。

d) サムウェア/エニウェアに則した価値観を測る尺度

先述したとおり、本研究ではイギリスのジャーナリスト David Goodhart が指摘するサムウェアとエニウェアという区分について着目し、両者がもつ価値観に則した心理尺度を作成する。

そこで、David Goodhart “THE ROAD TO SOMEWHERE”の中から、サムウェア、エニウェアの特徴として記述さ

れている箇所を抜き出し、その原文の意をくみ取りながら質問項目を作成した。具体的には原文の中から両者の特徴を説明している箇所として、” Somewheres are… “あるいは” Anywheres are… “等の記述がなされている文を抜き出した。また直接的にその両者が明示されていなくても、文脈上、そうしたサムウェアズ、エニウェアズの特徴について記述されていると判断された文についても抜き出した。それら抜き出した文と質問項目との関係を表-5、表-6 に示す。質問項目については、原文をそのまま用いたわけではないが、原文のもつ本来の意味を損なわぬよう留意しつつ、調査における回答者の答えやすさを考慮したうえで作成した。そして各項目について、「とてもそう思う」「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「ほとんどそう思わない」

表-4 質問項目 (Q4)

質問項目
1 もともと地元「以外」で就職しようとしていたが、就職活動に失敗した。成功したら地元「以外」で就職していたと思う
2 「地元」の「物価が高い」と「地元」以外で働いていたと思う
3 「地元」で「あまり経済的に豊かな生活が送れない」と、「地元」以外で働いていたと思う
4 「地元」の「治安が悪い」と「地元」以外で働いていたと思う
5 「地元」の「住環境があまりよくない」と「地元」以外で働いていたと思う
6 「地元」の「日常生活で使う公共交通機関が不便」だと、「地元」以外で働いていたと思う
7 「地元」で「あまり雇用機会がない」と、「地元」以外で働いていたと思う
8 「地元」の「人間関係が希薄である」と、「地元」以外で働いていたと思う
9 「地元」に「豊かな自然があまりない」と、「地元」以外で働いていたと思う
10 「地元」で「あまり育児環境が充実していない」と、「地元」以外で働いていたと思う
11 「地元」で「趣味や娯楽等の文化的機会が少ない」と、「地元」以外で働いていたと思う
12 「地元」に「やりがいのある仕事ができる企業が少ない」と、「地元」以外で働いていたと思う
13 「地元」に「職場環境のよい企業が少ない」と、「地元」以外で働いていたと思う
14 「地元」に「将来性のある企業が少ない」と、「地元」以外で働いていたと思う
15 「地元」に「待遇（給料・福利厚生）のよい企業が少ない」と、「地元」以外で働いていたと思う
16 「地元」に「友人が住んでいない」と、「地元」以外で働いていたと思う
17 「地元」に「家族が住んでいない」と、「地元」以外で働いていたと思う
18 「地元」に「友人が住んでいない」と、「地元」以外で働いていたと思う
19 「地元貢献したいという意識がない」と、「地元」以外で働いていたと思う

表-5 価値観 (サムウェアズ) について調査する質問項目

質問文	原文
自分の生まれ育った地域や母国に帰属意識を感じる。	[They] have strong group attachments, local and national.(24)
海外の人々の幸福よりも、自国民の幸福を優先するべきだと思う	[Somewheres], having a more 'fellow citizens first' view of national identity...(45)
社会が急速に変化していくことについて、あまり快く思わない	They were unable or unwilling to respond to cultural concerns about immigration and over rapid change.(220) They do not generally welcome change...(24) They often find rapid change more unsettling.(3)
実力主義的な社会は望ましくないと思う。	They feel uncomfortable[...] such as mass immigration, an achievement society...(5)
治安がよいことや地域に馴染みがあることは、よいことだと思う	They place a high value on security and familiarity...(24)
秩序や伝統に裏打ちされた社会が望ましいと思う	They are not [...] but regret the passing of a more structured and tradition bound world.(24)
社会においては、自由よりも安全が優先されるべきだと思う	[Somewheres],being prepared to sacrifice liberty for security.(45)

表-6 価値観 (エニウェアズ) について調査する質問項目

質問文	原文
自分は世界市民の一人だと思う。	They also see themselves as citizens of the world.(5)
世界の人々は人種や男女の違いを問わず、皆平等であると思う。	They fully embrace egalitarian and meritocratic attitudes on race, sexuality and gender...(24)
自立することや自己実現が、安定性や共同体、伝統よりも大事であると思う	They value autonomy and selfrealisation before stability, community and tradition.(24)
移民を受け入れることや、国境がボーダレスとなることに寛容である。	Anywheres have had [...] in their openness towards immigration and until Brexit Europe integration(112)
進学や就職で地域間を移動することをいとわない	Social mobility and meritocracy are central to the Anywhere...(180)
移動が自由にできることは、良いことであると思う。	Social mobility and meritocracy are central to the Anywhere...(180)
新しいものには、高い価値があると思う。	It places a high value on autonomy, mobility and novelty...(5)
仕事は人生そのものであり、自己実現である。	Work, and in fact life itself, is about individual selfrealisation.(5)
人生における成功体験が自分のアイデンティティのベースとなっている。	Such people have portable 'achieved' identities, based on educational and career success...(3)

「そう思わない」「全くそう思わない」の7件法で回答を求めた。

4. 分析結果

本章では、前章で述べたアンケート調査結果を取りまとめたうえで分析を行う。

なお分析に先立って、以下の回答者については不正回答としてデータから削除した。

- Q2の35項目全てに同じ数字を回答している回答者
- 地元外で就職しているにもかかわらず、Q2の『その場所が自分の「地元」だったから』に「やや重要な理由だ」以上の評価をしている回答者
- 地元で就職しているにもかかわらず、Q2の『(むしろ逆に)その場所が「自分の地元ではなかった」から』に「やや重要な理由だ」以上の評価をしている回答者

その結果、分析に用いたサンプルのサイズは計452となった。

(1) サムウェア尺度・エニウェア尺度の項目整理及び妥当性の確認

本研究の目的の一つは、Goodhartによる「サムウェア／エニウェア」という価値観軸の設定の妥当性を検証することであり、それはすなわち「地元定住を志向するか否か」という選好が、「社会の急速な変化を望むか否か」「実力主義を望むか否か」「伝統を重んじるか否か」「安全や安定を重んじるか否か」「グローバルな視野を持つか否か」「人種や男女の平等を重んじるか否

か」「新しいものを好むか否か」「仕事での成功を重んじるか否か」といった多様な選好と関連するという現象が、日本の若者においても見られるか否かを確認することである。このことが確認されれば、従来の意味での「保守／リベラル」という対立や、あるいは「高所得層／低所得層」といった階層の区別の他に、「サムウェアとエニウェア」という軸に沿って国民の価値観分布を把握し、それをもとに現代社会において望ましい政策は何であるかを議論する必要があるということが、明らかになる可能性がある。

そこで本節では、因子分析と主成分分析によって「サムウェア尺度」「エニウェア尺度」の項目整理及び成分分解を行う。その上でこれらの指標が実際の地元定住への志向や行動と関連しているか否かという観点から、構成概念妥当性を検証する。

a) サムウェア尺度・エニウェア尺度の因子分析及び基本統計

前章で作成したサムウェア尺度・エニウェア尺度の因子構造を特定するべく、因子分析を行う。尺度はGoodhartの研究に基づき、サムウェアの価値観の特徴を表す項目群と、エニウェアの特徴を表す項目群から成っているため、因子数は2と仮定し、プロマックス回転の下で因子モデルの推定を行った。なおサムウェア尺度の5番目の項目「治安がよいことや地域に馴染みがあることは、よいことだと思う」に関しては、2つの因子の双方に顕著な負荷を持っていたため除外することとした。その結果再度推定して得られた因子パターンが表-7のとおりである。

表-7に示されるとおり、当初想定した通り、「サム

表-7 サムウェア・エニウェア尺度の因子パターン

下位尺度	質問項目	第1因子	第2因子	共通性
エニウェア 尺度	6 移動が自由であることは、良いことであると思う	0.76	0.01	0.58
	4 移民を受け入れることや、国境がボーダレスとなることに寛容である	0.73	-0.13	0.44
	9 人生における成功体験が自分のアイデンティティのペースとなっている	0.73	0.02	0.54
	5 進学や就職で地域間を移動することをいとわない	0.69	-0.08	0.42
	3 自立することや自己実現が、安定性や共同体、伝統よりも大事であると思う	0.68	0.06	0.52
	7 新しいものには、高い価値があると思う	0.68	0.00	0.46
	8 仕事は人生そのものであり、自己実現である	0.62	0.06	0.42
	1 自分は世界市民の一人だと思う	0.60	0.11	0.45
	2 世界の人々は人種や男女の違いを問わず、皆平等であると思う	0.59	0.05	0.39
	サムウェア 尺度	7 社会においては、自由よりも安全が優先されるべきだと思う	0.22	0.55
1 自分の生まれ育った地域や母国に帰属意識を感じる		0.20	0.50	0.40
2 海外の人々の幸福よりも、自国民の幸福を優先するべきだと思う		0.10	0.61	0.45
6 秩序や伝統に裏打ちされた社会が望ましいと思う		0.05	0.69	0.52
4 実力主義的な社会は望ましくないと思う		-0.12	0.72	0.43
3 社会が急速に変化していくことについて、あまり快く思わない		-0.17	0.75	0.44

ウェア尺度」と「エニウェア尺度」の2つの下位尺度を持つ構造が得られたと言える。また、表-9 に項目削除後のサムウェア尺度・エニウェア尺度の基本統計を示すが、尺度内の各項目の整合性を表すクロンバックの α の値は 0.8 以上と高い値を示しており、Goodhart の指摘する価値観群を束ねて一つの尺度とすることに、一定の妥当性があることが確認された。

なお、表-8 で因子間相関が正となっているが、これは、サムウェア尺度の得点が高い回答者は、エニウェア尺度の得点も高い場合が比較的多いことを示している。Goodhart が言うように「サムウェア」と「エニウェア」が対立する価値観であるとするならば、これらの間には負の相関があってもおかしく無いため、これはやや直観に反する結果ではある。ただし尺度を構成している質問項目を見ると分かるように、いずれの尺度も「社会がどのようであるべきか」についての主張を問うものである。つまり、総じて「よりよい社会」を追求するという態度が、両方の尺度に反映されていると考えられる。したがってそのような態度を強く持つ回答者は、サムウェアの価値観もエニウェアの価値観についてもある程度理解することができ、逆にそのような態度の弱い回答者は、いずれの価値観についても強い関心を示さないという可能性が考えられる。

b) 主成分分析による尺度成分の分解

表-8 因子間相関

	第1因子	第2因子
第1因子	-	0.59
第2因子	0.59	-

表-9 サムウェア・エニウェア尺度の基本統計

下位尺度	平均	標準偏差	α
サムウェア尺度	4.08	1.21	0.82
エニウェア尺度	3.83	1.20	0.89

前項でみたとおり、サムウェア尺度とエニウェア尺度の間には正の相関があるが、これは両尺度に「より良い社会を望む」態度が含まれているからではないかと考えられる。逆に言えば、この「より良い社会を望む」態度の影響を取り除くことで、よりグッドハードの理論に忠実な、価値観の方向性としての「サムウェア」「エニウェア」の度合いを計測できる可能性がある。

そこで、それらの成分の分解を試みることにする。因子分析による項目除去後の尺度データに対して主成分分析を行った。その結果、表-10 のような主成分得点が得られた。第 1 主成分 (PC1) は全ての質問項目に対して一定の負荷を持っており、これが「より良い社会を望む」か否かに関する全般的な態度を示していると考えられる（ここでは符号が負であるため、「よりよい社会を望まない」度合いを意味する）。一方第 2 主成分 (PC2) は、サムウェア尺度に対して正の負荷を持ち、エニウェア尺度に対して負の負荷を持っている。すなわちこの主成分が、価値観の方向性がどれだけサムウェアの方を向いているかを表しており、サムウェア度が高ければエニウェア度が低くなるという次元の指標として捉えることができる。これらのことから、今回作成したサムウェア・エニウェア尺度によって計測される回答者の価値観は、「よりよい社会を望む（望まない）度合い」という全般的な態度に関する情報と、それとは直交する、つまり無相関な指標としての、「価値観の方向性がどれだけサムウェア的（エニウェア的）であるか」という情報を持っているといえる。なお、この2つに対応する主成分の累積寄与率が 0.53 であるから、尺度データが持つ情報の過半は、この2つの成分によって説明されることとなる。この主成分負荷量を重みとし、各尺度項目に対する回答得点に乗じることで、各回答者の主成分得点を算出すれば、「よりよい社会を望む」度合いと「サムウェア的である」度合いをそれぞれ指標として取

表-10 サムウェア・エニウェア尺度への主成分分析の結果（主成分負荷量）

尺度項目	PC1	PC2	PC3	PC4	PC5	PC6	PC7	PC8	PC9	PC10	PC11	PC12	PC13	PC14	PC15	
サムウェア	1	-0.30	0.34	0.02	0.45	-0.51	0.30	-0.26	0.25	-0.21	0.18	0.02	0.13	0.11	-0.04	0.04
尺度	2	-0.25	0.36	0.28	0.10	-0.10	0.23	0.34	-0.31	0.48	-0.33	-0.19	-0.25	0.01	0.13	0.00
	3	-0.17	0.39	-0.23	-0.24	0.30	0.06	-0.41	-0.11	-0.05	-0.12	0.44	-0.22	0.27	0.32	0.02
	4	-0.18	0.38	-0.23	-0.14	0.43	0.30	0.18	0.05	-0.18	0.28	-0.23	0.01	-0.43	-0.27	-0.13
	6	-0.22	0.29	0.08	-0.18	0.07	-0.48	-0.13	0.08	-0.02	-0.25	-0.31	0.23	0.36	-0.46	0.01
	7	-0.26	0.22	0.15	0.05	0.04	-0.54	0.25	0.29	0.03	0.18	0.14	0.19	-0.30	0.48	0.09
エニウェア	1	-0.28	-0.11	-0.29	0.10	-0.18	-0.25	0.26	-0.42	-0.57	-0.02	-0.17	-0.32	0.08	0.11	0.01
尺度	2	-0.31	-0.20	-0.63	0.18	-0.07	-0.18	-0.12	0.09	0.57	0.09	-0.02	-0.14	-0.07	-0.12	-0.09
	3	-0.26	-0.13	-0.07	-0.03	0.04	0.15	0.20	-0.43	0.07	0.12	0.28	0.70	0.19	0.01	-0.20
	4	-0.24	-0.28	-0.18	0.03	0.23	0.30	0.22	0.49	-0.14	-0.48	-0.16	0.14	0.19	0.24	0.11
	5	-0.27	-0.27	0.35	0.28	0.40	-0.01	-0.47	-0.18	0.01	0.17	-0.38	-0.01	-0.03	0.22	-0.13
	6	-0.31	-0.18	0.25	0.25	0.22	-0.03	0.05	-0.03	-0.07	-0.16	0.51	-0.16	-0.20	-0.46	0.36
	7	-0.25	-0.16	0.24	-0.30	0.01	0.09	0.25	0.24	0.08	0.54	0.05	-0.32	0.47	-0.07	-0.05
	8	-0.26	-0.14	0.00	-0.54	-0.28	0.14	-0.23	-0.12	0.05	0.05	-0.18	0.13	-0.24	0.07	0.59
	9	-0.28	-0.16	0.18	-0.33	-0.28	0.00	-0.14	0.12	-0.10	-0.27	0.15	-0.09	-0.32	-0.04	-0.65
累積寄与率		0.42	0.53	0.61	0.67	0.73	0.76	0.80	0.83	0.87	0.89	0.92	0.94	0.96	0.98	1.00

※PC1, PC2…は第1主成分, 第2主成分…を表す。

り出し、他の変数との関係を分析することも可能となる。

c) サムウェア・エニウェア尺度の構成概念妥当性の確認

本項では前項で作成したサムウェア・エニウェア尺度が、実際に回答者の居住地選択と仮説どおりの関連性を持っているか否かを検証することとする。これは、サムウェア・エニウェア尺度の構成概念妥当性の確認の一環であると言える。

もちろん本来は、たとえばイギリスのブレグジットに相当するような特定の政策への賛否データと照らし合わせる形で、サムウェア・エニウェアという価値観指標が Goodhart の主張するような政策選択と結びつくのか否かが検証されるべきであるが、本研究では特定の政策への賛否データを取得してはいない。そこで、回答者が就職地選択において、地元を選択したか大都市への移住を選択したかというデータとの整合性のみを確認しておくこととする。

確認方法としてはさまざまな方法が考えられるが、ここでは、地元で就職したか大都市へ移住して就職したかという 2 値の目的変数を、サムウェア・エニウェアの価値観の違いによって説明できるかを、ロジスティック回帰分析によって確認しておくこととする。ただし先述のとおり、サムウェア度とエニウェア度の間には正の相関があり、サムウェアとエニウェアの違いを捉えることはそのままでは難しい。そこで、「サムウェア度が高く、エニウェア度が低い」回答者を「サムウェア」と定義し、「サムウェア度が低く、エニウェア度が高い」回答者を「エニウェア」と定義して、前者が後者に比較して定住を選択しやすい傾向にあるかを確認する。

また、先ほどの主成分分析で第 2 主成分として抽出された、次元指標としてのサムウェア度指標を説明変数とした分析も、合わせて行う。

まず「サムウェア」に該当する対象者が「エニウェア」と比較して、地元就職をする傾向が高いかどうかを検討した結果が表-11 である。ここでは就職地（地元就職=1, 非地元就職=0）を従属変数とし、サムウェアーズ

表-11 サムウェアーズと就職地選択傾向との関連を検討した二項ロジスティック回帰分析

	B	標準誤差	有意確率	Exp(B)
サムウェアーズダミー	1.192	0.356	<.01	3.294
定数	0	0.224	1	1

表-12 サムウェア度と就職地選択傾向との関連を検討した二項ロジスティック回帰分析

	B	標準誤差	有意確率	Exp(B)
サムウェア度	0.178	0.049	<.01	1.195
定数	0.828	0.104	<.01	2.288

ダミー（サムウェア：1 それ以外：0）を説明変数とする二項ロジスティック回帰を行った。サムウェアーズダミーにおける回帰係数は正で有意となり、サムウェアがエニウェアに比較して地元就職を選択する傾向が高いことが確認された。これにより地元で就職するか、大都市へ移住して就職したかを、サムウェア、エニウェアの価値観の違いによって説明することができたといえる。また一方で次元指標としてのサムウェア度と就職地選択傾向との関連を検討した結果が表-12 である。ここでは就職地（地元就職=1, 非地元就職=0）を従属変数とし、サムウェア度を説明変数とする二項ロジスティック回帰を行った。サムウェア度における回帰係数は正で有意となり、サムウェア度が高いほど地元就職を選択する傾向があることが確認された。これによりやはりサムウェアとエニウェアという価値観の違いによって、地元で就職をするか、大都市へ移住して就職するかを説明することができたといえる。

d) サムウェアーズとエニウェアーズの構成比について

なお Goodhart は、サムウェアとエニウェアのシェアについては、サムウェアは約 5 割、エニウェアについては約 2~3 割、どちらにも分類できない中間層が残りのシェアを占めると指摘している。一方で本研究では先ほどのサムウェア尺度、エニウェア尺度によって「サムウェア度が高く、エニウェア度が低い」回答者を「サムウェア」と定義し、「サムウェア度が低く、エニウェア度が高い」回答者を「エニウェア」と定義し、それ以外の対象者をどちらにも属さない中間層（その他）として分類を行った。その統計を表-13 に示す。本研究において示されたその割合はサムウェアが約 16.2%、エニウェアについては約 17.7%、分類のできないものは約 66.2% という結果となり、Goodhart の指摘する三者のシェアとは異なる結果となった。このシェアが異なる結果となった理由については 5 において後述することとする。

(2) 定住を促進する要因の検討

本節以降では、地方分散定住型社会の実現に役立つ政策的含意を引き出すため、若者が初就職地を選択するうえで、どのような条件を重視しているかを明らかにし、これにより地元地域にどのような性質が備わっていることで定住化が促進されるのか示唆を得る。ここではまず、

表-13 サムウェア及びエニウェアの割合

	地元外就職者	地元就職者	計
サムウェア	17(3.8%)	56(12.4%)	73(16.2%)
エニウェア	40(8.8%)	40(8.8%)	80(17.7%)
その他	83(18.4%)	216(47.8%)	299(66.2%)
計	140(31.0%)	312(69.0%)	452(100%)

全ての調査対象者に渡って、定住促進要因と考えられるものが何であるのかを検討する。

そこで、まず従属変数を就職地（地元就職=2, 地元外就職=1）とするロジスティック回帰分析（変数選択はステップワイズ法による）を行うこととする。説明変数として、Q2（就職地をその場所に選んだ理由として各項目がどの程度重要かを尋ねたもの）における回答者得点を採用した。またサムウェアーズとエニウェアーズを区別した検討は次節でも行うが、本分析においても先述のサムウェア、エニウェアの定義に基づき、サムウェアーズダミー（サムウェア=1, それ以外=0）と Q2 各項目の回答者得点を乗じた交互作用項、エニウェアーズダミー（エニウェア=1, それ以外=0）と Q2 各項目の回答者得点を乗じた交互作用項を説明変数として投入し、これによりサムウェアーズとエニウェアーズの選好の違いを検討することとした。表-14 にその結果を示す。正の係数となったのは、「その場所が自分の『地元』だったから」「『地元の友人がいる』場所だから」「『狭いコミュニティや人間関係に疲れることはなさそう』な場所だから」の三つの変数となった。一方、負の係数となったのは、「（むしろ逆に）その場所が『自分の地元ではなかった』から」「『自分にとってやりがいのある仕事ができる企業』が『たまたまそこにあったから』から」「『雇用機会が豊富な都道府県』だったから結果的にそうだった」「『大都市圏へのアクセスがよいところ』（もしくは大都市圏そのもの）だから」、そしてエニウェアーズダミー×「『将来性の高い企業』が『たまたまそこにあった』から」の交互作用項である。

各々の説明変数の正負から、就職地が地元であることや人間関係を重視する人々が地元で就職することを選択し、やりがいのある仕事の有無や雇用機会が豊富であること、就職地が大都市圏であることを重視するような人々が地元外へ転出する傾向が浮かび上がる。またエニウェアーズについては、将来性の高い企業の有無を重視しているものが実際に地元ではない場所で就職する傾向も示された。これらの傾向から地元で就職するか、地元ではない地域で就職するか、その選択の分岐は、家族や人間関係を重視するか、もしくは良質な働き口があるこ

とを重視するかに起因しており、若者の就職地選択は両者が天秤にかけられたうえで行われている可能性があることが考えられる。

(3) サムウェアーズの定住を促進する要因の検討

Goodhart や本研究が述べる「サムウェア」は、もちろん地元への定住を志向する人びとを指してはいるが、それだけではなく、その他の選好をも含めた一つの価値観体系を支持する人びとを指している。つまり、サムウェア度が高いことは、単に地元への愛着を意味しているわけではなく、政治的に保守的であったり、グローバル化に批判的であったり、新自由主義的な価値観に反対しているといった性質をも含意することになる。

そうした複合的な価値観体系を考えることの意味は、まさに Goodhart がブレグジット投票の分析を通じて論じているように、新自由主義やグローバル化からの転換が生じつつある現代の世界において、重要な政策選択に影響を及ぼしていると考えられるからであった。

本研究の目的は、若者の就職地選択要因を探ることで地方分散定住型の社会を実現する方策を検討することであるが、とりわけサムウェアーズの人びとの地元定住を促すことには、いくつかの意味がある。第一に、「そもそも定住を望んでいる人」が定住可能になるわけであるから、そうではない人の定住が促進されるよりも、国民全体の幸福度の上昇に寄与すると考えられる。第二に、エニウェアーズの人びとが定住化する場合よりも、サムウェアーズの人びとが定住化する場合のほうが、その定住が長続きする可能性が考えられ、もしそうだとすれば、東京一極集中の解消という点で、効果的であると考えられる。第三に、サムウェアーズは、新自由主義やグローバルイズムに対して違和感を持ち、地方定住を軸として、保守的で安定した生活世界を築き上げようとする人びとである。ブレグジットやトランプ大統領の誕生といった現象は、グローバル化の弊害に対する反動であると言われるように、サムウェアーズの価値観は、今後の我が国や世界にとって望ましい価値観を体現する人びとである可能性がある。そうであるならば、そうした人びとの地元定住を促すことには、望ましい社会を形成するという

表-14 定住促進要因の検討を行うロジスティック回帰

	B	標準誤差	有意確率	Exp(B)
その場所が自分の「地元」だったから	1.701	0.273	<.01	5.478
(むしろ逆に) その場所が「自分の地元ではなかった」から	-0.562	0.212	<.01	0.57
「自分にとってやりがいのある仕事ができる企業」が「たまたまそこにあった」から	-0.417	0.122	<.01	0.659
「雇用機会が豊富な都道府県」だったから結果的にそうだった	-0.629	0.173	<.01	0.533
「地元の友人がいる」場所だから	0.622	0.178	<.01	1.863
「大都市圏へのアクセスがよいところ」（もしくは大都市圏そのもの）だから	-0.715	0.166	<.01	0.489
「狭いコミュニティや人間関係に疲れることはなさそう」な場所だから	0.289	0.15	0.054	1.335
(エニウェアーズダミー) * (「将来性の高い企業」が「たまたまそこにあった」から)	-0.443	0.153	<.01	0.642
定数	1.315	0.701	0.061	3.723

点で、重要な意義があるのではないかと考えられる。

そこで、本節では Q2（就職地をその場所に決めた理由の調査）、Q3（地元都道府県に就職することがあり得たと思う条件の調査）、Q4（地元外の都道府県に就職することがあり得たと思う条件の調査）の各質問項目において、サムウェアーズとエニウェアーズの回答得点の平均値差を検定する。これにより、どの質問項目においてエニウェアーズよりもサムウェアーズが高い得点を記録しているか、すなわちエニウェアーズよりもサムウェアーズが重視している条件は何であるかを明らかにする。また合わせて一次元指標としてのサムウェア度と Q2, Q3, Q4 の各質問項目の回答者得点との相関係数についても測ることとした。平均値差の検定と相関係数、二つの指標を用いることでサムウェアーズの重視する要因は何か、高い精度で把握ができるものと考えられる。まず Q2 の結果から読みとることの出来る傾向について記述する。表-15 の質問項目リストはサムウェアーズの得点が高い順に記載し、なおかつ両者の有意差があったもののみ示している。エニウェアーズよりも総じて平均点が高く、なおかつその得点が高い項目は「その場所が自分の『地元』だったから」「『家族がいる』場所だから」であることが分かる。これらはサムウェアーズが就職地を選択するうえで重視する要因が、家族がいることや地縁関係があることを示していると考えられる。また同様に Q2 において、一次元サムウェア度と回答得点との相関を計測したが、そのうち有意なものを示した表-16 の結果においても「その場所が自分の『地元』だったから」「『家族がいる場所』だから」は正の有意な相関を示している。つまりサムウェア度が高いほど、就職

地が自分の地元であることや家族がいることを重視する傾向があることが読み取れる

一方で、Q3 に答えた回答者、つまり地方部出身でありながら大都市に移住している人々は、どのような条件があれば地元に戻ることがあり得たであろうと回答しているか、これについてもサムウェアーズとエニウェアーズについて平均値差の検定、ならびに相関をとることで比較を行った。表-17 及び表-18 に有意であった項目を示す。回答得点として高く、なおかつその水準が統計的に有意にサムウェアーズの方が高い項目は、「『地元』が『雇用機会が豊富な都道府県』であったら、『地元』で就職していたと思う」「『地元』に『規模の大きい企業がある』と、『地元』で就職していたと思う」「『地元』の『企業の採用試験に合格した』のであれば、『地元』で就職していたと思う」「『地元』が『給与水準のよい働き口が豊富にある都道府県』であったら、『地元』で就職していたと思う」といった項目である。また一次元サムウェア度との相関を示した表-18 においてもそれらの項目は有意な正の相関を示している。したがって、サムウェアーズの人々はこのような労働条件等に関する環境が地元を整備されるのであれば、地元にとどまる度合いが高いと考えられる。以上、Q2, Q3 から得られる示唆を以下に示す。Q2 においては、サムウェアーズが重視する項目は、「家族がいること」、「その地が地元であること」であることが明らかとなった。また Q3 の結果においては地元外に転出したサムウェアーズの人々が雇用機会や給与水準等、労働条件が地元を整備されることとなれば地元で就職した可能性が高いことも示された。これらのことから、現在地方部においては、

表-15 サムウェア/エニウェアの価値観の相違が就職地選択要因の重要度に与える影響

質問項目	サム平均	エニ平均	自由度 (サム)	自由度 (誤差)	F値	p値
1 その場所が自分の「地元」だったから	4.54	3.12	1	151	18.143	<.01 **
18 「家族がいる」場所だから	4.22	3.45	1	151	5.547	<.05 *
7 「待遇（給料・福利厚生）のよい企業」が「たまたまそこにあった」から	4.00	4.81	1	151	7.231	<.01 **
33 「友人・知人にプライベートには干渉されなさそう」な「気楽な場所」だから	3.05	2.54	1	151	5.099	0.025 *
20 「親や家族の意向で、この場所で働け」と言われたから	2.83	2.03	1	151	9.237	<.01 **
2 (むしろ逆に) その場所が「自分の地元ではなかった」から	1.78	2.54	1	151	9.314	<.01 **

** : p<.01 * : p<.05

表-16 一次元サムウェア度と就職地選択要因の重要度との相関関係

質問項目	一次元サムウェア度
1 その場所が自分の「地元」だったから	.209 **
20 「親や家族の意向で、この場所で働け」と言われたから	.159 **
23 「大都市圏へのアクセスがよい」ところ（もしくは大都市圏そのもの）だから	-.128 **
16 「豊かな自然がある」ところだから	.123 **
26 「欲しいものが手に入りやすい」ところだから	-.119 *
18 「家族がいる」場所だから	.118 *
7 「待遇（給料・福利厚生）のよい企業」が「たまたまそこにあった」から	-.097 *
19 「地元の友人がいる」場所だから	.094 *

** : 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

* : 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

表-17 サムウェア/エニウェアの価値観の差異が
「地元就職」への行動変容につながる条件に与える影響

質問項目	サム平均	エニ平均	自由度 (サム)	自由度 (誤差)	F値	p値
3 「地元」が「雇用機会が豊富な都道府県」であったら、「地元」で就職していたと思う	4.80	2.74	1	55	19.485	<.01 **
21 「地元」に「規模の大きい企業がある」と、「地元」で就職していたと思う	4.71	3.51	1	55	7.649	<.01 **
22 「地元」の「企業の採用試験に合格した」のであれば、「地元」で就職していたと思う	4.67	2.65	1	55	18.641	<.01 **
4 「地元」が「給与水準のよい働き口が豊富にある都道府県」であったら、「地元」で就職していたと思う	4.30	3.30	1	55	4.712	<.05 *
10 「地元」が「欲しいものが手に入りやすい」ところであったら、「地元」で就職していたと思う	3.91	2.89	1	55	6.100	<.05 *
1 もともと「地元」で就職しようとしていたが、就職活動に失敗した。成功したら「地元」で就職していたと思う	3.25	2.35	1	55	4.614	<.05 *
2 「地元」での就職を全く考えていなかったの、どうい就職先があるのかわからなかった。もし情報を集めていたら、「地元」で就職していたと思う	2.85	2.13	1	55	4.017	<.05 *

** : p<.01 * : p<.05

表-18 一次元サムウェア度と
「地元就職」への行動変容につながる条件との相関関係

質問項目	一次元サムウェア度
3 「地元」が「雇用機会が豊富な都道府県」であったら、「地元」で就職していたと思う	.324 **
10 「地元」が「欲しいものが手に入りやすい」ところであったら、「地元」で就職していたと思う	.270 **
4 「地元」が「給与水準のよい働き口が豊富にある都道府県」であったら、「地元」で就職していたと思う	.251 **
22 「地元」の「企業の採用試験に合格した」のであれば、「地元」で就職していたと思う	.240 **
5 「地元」が「育児環境が充実している」ところであったら、「地元」で就職していたと思う	.231 **
1 もともと「地元」で就職しようとしていたが、就職活動に失敗した。成功したら「地元」で就職していたと思う	.210 *
25 「地元」に話の合う人が多ければ、「地元」で就職していたと思う	.197 *
23 「地元」に「どのような仕事や企業があるかを知っていた」のであれば、「地元」で就職していたと思う	.194 *
24 「地元」で「友人・知人にプライベートに干渉される機会」が少なければ、「地元」で就職していたと思う	.169 *

** : 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

* : 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

表-19 サムウェア/エニウェアの価値観の差異が
「地元外就職」への行動変容につながる条件に与える影響

質問項目	サム平均	エニ平均	自由度 (サム)	自由度 (誤差)	F値	p値
17 「地元」に「家族が住んでいない」と、「地元」以外で働いていたと思う	4.08	4.42	1	93	.379	.540
7 「地元」で「あまり雇用機会がない」と、「地元」以外で働いていたと思う	3.84	4.22	1	93	.621	.433
13 「地元」に「職場環境のよい企業が少ない」と、「地元」以外で働いていたと思う	3.61	4.36	1	93	2.446	.121
5 「地元」の「住環境があまりよくない」と「地元」以外で働いていたと思う	3.60	3.69	1	93	.015	.904
15 「地元」に「待遇(給料・福利厚生)のよい企業が少ない」と、「地元」以外で働いていたと思う	3.60	3.97	1	93	1.011	.317
4 「地元」の「治安が悪い」と「地元」以外で働いていたと思う	3.59	3.56	1	93	.077	.782
3 「地元」で「あまり経済的に豊かな生活が送れない」と、「地元」以外で働いていたと思う	3.45	3.53	1	93	.001	.980
6 「地元」の「日常生活で使う公共交通機関が不便」だと、「地元」以外で働いていたと思う	3.44	3.35	1	93	.253	.616
1 もともと地元「以外」で就職しようとしていたが、就職活動に失敗した。成功したら「地元」以外で就職していたと思う	3.33	3.12	1	93	.522	.472
12 「地元」に「やりがいのある仕事ができる企業が少ない」と、「地元」以外で働いていたと思う	3.31	3.86	1	93	1.853	.177
14 「地元」に「将来性のある企業が少ない」と、「地元」以外で働いていたと思う	3.29	3.98	1	93	2.332	.130
9 「地元」に「豊かな自然が少ない」と、「地元」以外で働いていたと思う	3.23	2.64	1	93	5.046	<.05 *
19 「地元」が「貢献したい」という意識がない」と、「地元」以外で働いていたと思う	3.16	2.70	1	93	1.948	.166
18 「地元」に「友人が住んでいない」と、「地元」以外で働いていたと思う	3.15	3.75	1	93	1.834	.179
16 「地元」に「友人が住んでいない」と、「地元」以外で働いていたと思う	3.14	3.17	1	93	.000	.990
11 「地元」で「趣味や娯楽等の文化的機会が少ない」と、「地元」以外で働いていたと思う	3.14	2.57	1	93	3.338	.071
8 「地元」の「人間関係が希薄である」と、「地元」以外で働いていたと思う	3.07	3.08	1	93	.184	.669
10 「地元」で「あまり育児環境が充実していない」と、「地元」以外で働いていたと思う	2.99	2.57	1	93	2.056	.155
2 「地元」の「物価が高い」と「地元」以外で働いていたと思う	2.87	2.82	1	93	.512	.476

** : p<.01 * : p<.05

地元での就職や家族と一緒に暮らすことを望んでいるが、良質な働き口が整備されていないために、やむなく都会へ就職するサムウェアーズが一定数存在することが予想される。したがって、そうした人々が地元に住み続けるためには、良質な働き口を彼らの地元を整備することが

必要であると考えられる。

最後に Q4 (地元外の都道府県に就職することがあり得たと思う条件の調査) において、分析した結果について記述する (表-19 参照)。まずサムウェアーズとエニウェアーズの間で両者に統計的に有意な平均値の相違が

あった項目については、「『地元』に豊かな自然があまりない』と、『地元』以外で働いていたと思う」のみであった。豊かな自然を希求する度合いがサムウェアーズの方が高いといえることができる。ただし、この項目の得点そのものはあまり高い水準ではない。またそれら Q4 の各項目の回答者得点と次元サムウェア尺度との相関係数をとった結果については有意な相関がみられた項目がなかった。地方部に居住しているサムウェアーズとエニウェアーズにおいては各項目についてその重視する度合いの差異が明確には表れなかったといえる。

ただし、差異こそみられないものの、表-19 では、サムウェアーズとエニウェアーズ双方とも、「地元外就職」への行動変容につながる条件としては、地元で家族が住んでいなければ、地元以外で働いていたと回答する若者が多く、また雇用機会があまりないと地元以外で働いていたとする回答得点も高い水準となっている。このことはやはり前節でも見てきたように、家族の存在、そして良質な働き口があることが、若者にとって就職地を選択するうえで重要な要因となっていることを示していると考えられる。

5. 考察及び今後の課題

(1) サムウェア・エニウェアの価値観軸としての妥当性

本研究では、人口の地方分散・定住型社会を実現するための政策検討に資することを目的として、地方出身の若年層を対象に、地元で留まって就職した人びとと、大都市部へ移住して就職した人びとに区別した上で、就職地選択要因の調査を行った。

またその際、イギリスのジャーナリスト、David Goodhart がサムウェアーズ/エニウェアーズと分類する価値観の違いを計測する心理尺度の作成を行い、こうした価値観が妥当であるのか否かと、それが定住・移住といった行動の選択と関わりを持つのか否かを検証した。

まずサムウェア/エニウェア尺度については、地元への定住を志向するかどうか、「社会の急速な変化を望むか否か」「実力主義を望むか否か」「伝統を重んじるか否か」「安全や安定を重んじるか否か」「グローバルな視野を持つか否か」「人種や男女の平等を重んじるか否か」「新しいものを好むか否か」「仕事での成功を重んじるか否か」といったさまざまな価値観が関連していることが明らかになり、これらが一つの価値観体系として人々を二分する傾向があるという Goodhart の仮説が一定の妥当性を持つことが実証的に示された。また、サムウェア/エニウェアの違いは、実際に居住地選択に影響を与えていることも示された。

サムウェア/エニウェアという分類は、新自由主義や

グローバル化の弊害に対する反動として、ブレグジットやトランプ大統領誕生といった現象が生じてきた背景を説明する理論として提唱されたものである。そして、サムウェアーズの価値観が、新自由主義やグローバル化からの反転の時代において、重要な役割を果たすとされている。それが真実であるとするならば、本研究を通じて、サムウェア/エニウェアという分類軸にそって人びとの価値観を計測する方法が開発されたことは、今後のさまざまな重要な政策検討において、有益な知見になるものと思われる。

(2) 若者及びサムウェアーズの定住を促進する要因

また 4 では若者の重視する就職地選択要因を明らかにしたが、その結果彼らが地方への定住を促進する要因としては、都会的なかつよさや、娯楽・文化の充実や、子育て環境の整備などよりも、「良質な雇用が地域に存在すること」が重要であることが明らかになった。

またサムウェアーズがエニウェアーズと比して重視していると考えられる要因についても、総じてその地が地元であり、家族がいることであることが明らかとなり、一方で「地元ではない場所で就職したサムウェアーズ」は、仮に地元で良質な雇用があったとすれば地元で暮らしたであろうと高い水準で回答していることが分かった。これらの結果は、地元で就職することを希望していたにも関わらず、良質な雇用がなかったためにそれが叶わなかったサムウェアが一定数存在することを示唆しており、現状の雇用機会の分布が国民の幸福を増進するものとなっていないことを、実証的に示していると言える。サムウェアーズがエニウェアーズに比して地元定住する可能性の高い人々であることを踏まえると、地方分散・定住型社会を実現するうえでは彼らの重視する条件を優先的に検討することで、より効率的かつ実効性の高い人口分散が推進できる可能性がある。

(3) 今後の課題

ただし本研究には、限界もいくつかある。

まず、本研究で作成したサムウェア/エニウェア尺度は一定の妥当性を持つものであると考えられるものの、今回の研究では、特定の政策への賛否と比較するデータを得られてはいない。もともと Goodhart がこの概念を提唱したのは、ブレグジットやトランプ現象の背景を説明するためであったことを考えれば、今回開発された尺度を今後、より具体的な政策選択と比較し、その影響について知見を蓄積することが必要であると思われる。

また本研究で作成した尺度で、今回調査対象となった若者をサムウェアーズ、エニウェアーズに分類することを試みたが、Goodhart が言及しているイギリス国内におけるサムウェアーズやエニウェアーズと本研究で分類を

行ったサムウェアーズやエニウェアーズでは、その性質がやや異なる可能性があることにも注意が必要である。

Goodhart は、イギリス国民の過半をサムウェアーズがしめ、エニウェアーズが 2 割、それ以外の分類できない中間層が 2~3 割存在することを指摘しているが、本研究の調査では、サムウェアーズ（「サムウェア尺度の得点が高くかつエニウェア尺度の得点が低い人」とエニウェアーズ（「サムウェア尺度の得点が低くかつエニウェア尺度の得点が高い人」）の合計は全体の三分の一程度であり、残りはいずれにも分類されない結果であるから、Goodhart が主張するほどに二極化がみられなかったといえる。これはわが国では今のところイギリスほど移民の進出が進んでいないことや、ロンドンが東京に比べてもグローバル金融ビジネスへの依存の高い都市であることなどが要因として考えられる。ただし、本研究で作成した心理尺度がサムウェアーズやエニウェアーズのもつ価値観について十分にとらえきれなかった可能性も考えられるため、引き続きその測定方法についても検証が必要であろう。

また、本研究では、どのような条件が満たされると「地元定住から都会移住へ」「都会移住から地元定住へ」といった行動変容が生じ得るかを計測しているが、これらはあくまで主観的かつ定性的な条件を聞いているものであって、より確度の高い議論をするためには、地域の雇用やその他の経済的環境を客観的な指標として取り込んだ上での分析を行う必要がある。そうした研究を通じて、より厳密に、地方分散・定住型社会を形成するために必要な政策が何であるかを検討できるものと考えられる。

参考文献

- 1) 石黒格, 李永俊, 杉浦裕晃, 山口恵子: 「東京」に出る若者たち, ミネルヴァ書房, 2012.
- 2) 内閣官房: 大都市圏への移動等に関する背景調査, 2015.
- 3) 平田将大, 川端祐一郎, 藤井聡: インフラ投資が人口の一極集中化に与える影響に関する研究, 土木計画学研究・講演集 vol.57, 2018
- 4) 柳川篤志, 川端祐一郎, 藤井聡: インフラ整備水準が人口の一極集中に与える影響に関する研究, 土木学会論文集 D3 (土木計画学) 特集号, 75 (6), 2020
- 5) 中村高康: 高校生のローカリズムと大学進学, 高等教育研究 第 14 集, pp47-60, 2011.
- 6) 労働政策研究・研修機構: 若者の地域移動-長期的動向と

- マッチングの変化, 2015
- 7) David Goodhart: THE ROAD TO SOMEWHERE, HURST & COMPANY, LONDON, 2017
- 8) 柴山圭太: 静かなる大恐慌, 集英社新書, 2012
- 9) 青木俊明: 人口移動研究の展開と今後の展望, 土木計画学研究・論文集 No.14, 1997
- 10) Hicks, J.R., 内田忠寿 (訳): 賃金の理論, 東洋経済新報社, 1965
- 11) 豊田哲也: 日本における所得の地域間格差と人口移動の変化, 経済地理学年報, 第 59 巻, 2013
- 12) Schultz, T.W.: Agriculture in an unstable economy, New York, McGraw-Hill, 1945
- 13) 勇上和史: 12 賃金・雇用の地域間格差, 2010
- 14) Sjaastad, L.A.: The cost and returns of human migration, Journal of Political Economy, Supplement, 1962
- 15) 青山吉隆, 近藤光男: 地域間効用差に基づく人口の社会移動モデルに関する研究. 土木計画学研究・論文集, 10, 151-158, 1992
- 16) 林勇貴, 林宜嗣: 地域競争力と地域間人口移動. 経済学研究, 71(3), 59-81. 2017
- 17) Nelson, P.: Migration real income and information, Journal of Regional Science, Vol.11, No.1, 1969
- 18) 杉山成: 大学生における地元志向意識とキャリア発達. 小樽商科大学人文研究, 123, 123-140, 2011
- 19) 前村奈央佳: 移動と定住に関する心理的特性の検討: 異文化志向と定住志向の測定および関連性について, 関西学院大学先端社会研究所紀要= Annual review of the institute for advanced social research, (6), 109-124, 2011
- 20) 米原拓矢, 田中大介: 地元志向と心理的特使絵の関連-新たな発達モデルの構築に向けて-, 地域学論集, 第 11 巻, 第 3 号, 2015
- 21) Will Jennings, Gerry Stoker: Tilting Towards the Cosmopolitan Axis?, The Political Quarterly, vol.88, No.3, July-September, 2017
- 22) Katy Morris, Neil Lee, Thomas Kenemy: mobility and Brexit, Cambridge Journal of Regions, Economy and Society, 2018, 11, 143-163

An exploratory analysis of the drivers of young people's local rootedness considering the difference between "Somewheres" and "Anywheres"

Sho KATAOKA, Yuichiro KAWABATA and Satoshi FUJI

In Japan, the Overconcentration in Tokyo and the local decline is remarkable, there is a concern about

increasing disaster risk and imbalance in the land. There is a possibility that the welfare of the people may have declined because young people who want to settle locally are forced to move to Tokyo when they find employment. In order to halt this trend and to explore ways to realize “Settled society”, this study investigated the reasons for selecting the place of employment among young people from rural areas, local and large city employees. We also developed a scale to measure the values that follow the “Somewheres / Anywheres” personality classification proposed by the British journalist David Goodhart(2017), and evaluated the validity of the values classification and the factors that determine the place of employment between them. I checked whether they were different. As a result, it was clarified that this value classification had validity and affected the choice of place of employment, and that there was a slight difference between the Somewheres and Anywheres in terms of local settlement promotion factors.